

# いばうはん

情勢判断学会 東京本部  
会員向けニューズレター  
発行人 古川 彰久  
事務局 〒105-0011 東京都港区  
芝公園2-6-11 芝公園ビル 9F 1001  
(有)イキキライフ内  
Tel. 03 - 3432 - 0584  
Fax. 03 - 3432 - 0582  
http://www.jouhan.com  
E-mail: info@iki2life.com

## 6 月例会ご案内

日時 : 6 月 12 日 水曜日  
18:30 ~ 21:00

テーマ : 「命再生の原点・玉川温泉と歩んで 40 数年」  
場所 : 港区立商工会館  
参加費 : 1000 円  
担当 : 大城 源吉

(自身の体調合わせた機能的に難病を治していく湯治法)

難病を癒す無限の可能性は・心に描き上げていく癒しの信念

玉川温泉の大噴湯から湧き出る「癒しの波動」が連動しながら、温泉と岩盤に癒しを伝導していきます。大噴湯からマイナスイオン、活性イオン、ラドンが満ち溢れ、プラスの波動が岩盤に癒しの共鳴振動しながら、伝わっていきます。温泉に入る時も、「満ち溢れた癒しの想い」を全身に浸りながら、浸透、吸収させ体内に満たしていきます。

玉川温泉湯治法は、私たちが本来持っている自然治癒力(病気から体を守ろうとする力)を高めることが目的です。私たちの体には、いつも生体機能バランスを保ち、健康を維持しようとする働きがあります。これを、自然治癒力、または恒常性維持能力といいます。そこで必要な免疫活力をあげる「玉川温泉湯治療法・岩盤温浴代謝療法・打たせ湯療法」を選択しながら、自分の体力と体調に合わせて機能的に行う湯治法です。

玉川温泉湯治のワンツースリー

玉川温泉の **湯治** 体調に合わせながら癒し心を盛上げる。

**闘治** 沁みる痛さを乗り越え免疫を上げ難病を克服する。

**湯路** 感謝の心と、癒しの道筋を踏みしめて癒して行く

【玉川温泉の強酸性が難病に効くわけ】  
驚異の強酸性湯が皮膚に強い刺激をあたえる。

肌にしみる痛さを耐えることによって、身体が自己防御体制を整えつつ免疫力をあげながら治していきます！！

(pH1.2) 肌に沁みる痛さを制御し、自分の精神(こころ)と身体で中和できるゆったり湯治法で免疫上げて癒していく。

湯治療法のストレスを岩盤浴でリラックス、癒しの相乗効果をあげる。

人によって体力・氣力・精神力・病状・生命力も違います。(湯治法も当然体調に合わせて行います)

### 【治す湯治法】か【治していく湯治法】の選択

「治す」湯治法は、生命力旺盛な人向きで、氣力、体力、精神力を備えた人向きの湯治法で、浸透吸収性が早い活性湯治法ですが旺盛な湯治意欲と体力のあるごく限られた人の湯治法になります。

### 【難病を治していく湯治法】

「治していく」湯治法とは、体力、病状、その時の体調や疲労感、年齢に適した対応と、自身の体調に合わせながら、無理をせず着実に、湯治効果を上げていく湯治法です。とても厳しい状況を乗り越え、後に難病を克服した人達の共通点は、「ありがとうの」篤い感謝の心と・前向きな一貫した癒しの姿勢です。

玉川源泉・岩盤浴・打たせ湯 = 相乗効果

(参考)私の湯治体験より、全快した病名を下記に記す。  
脳腫瘍、白血病、子宮癌、膀胱ガン、前立腺ガン、乳ガン、肺がん、肝臓ガン、腎臓ガン、食道がん、胃ガン、大腸ガン、糖尿病、脳梗塞の後遺症、その他。時には難病の方を観察しながらリハビリも含め、癒し心を描きあげていく癒しの姿勢をアドバイスしてきた。

玉川温泉は、私の余命を授けてくれた原点、少しでも難病に苦しむ方に癒し心を盛り上げながら、治せる湯治法のアドバイスを行ってきました。

# 4月例会報告

日時 : 4月10日 水曜日  
18:30 ~ 21:00  
テーマ : 「 鎮守の森の植生」  
場所 : 港区立商工会館  
担当 : 石田 金次郎

鎮守の森の「鎮守」は、広辞苑によると「 兵士を駐在させて、その地を鎮め守ること」、「 その地を鎮め守る神、また、その社」と記されています。鎮守の森は、鎮守の社にある森のことです。鎮守の社とも表現されたりします。

日本人は、山川草木、あらゆるものに神が宿ると考えてきました。その神は、本居宣長は古事記伝で、「神は優れ、徳があり、かしこきものですが、尊くよきものだけでなく、あしきもの、あやしきものもふくんでいる」と書いています。

このような神を信ずる信仰、意識は古代からあり、仏教伝来があっても、神仏習合し、寺と神社はお互いに補い合って共存してきたのはご存じの通りです。

つまり、日本人は古来より地震、津波、噴火、台風などの自然災害が頻発する災害列島に住み、自然の猛威を前に、あらゆる森羅万象に八百万の神の存在を感知して、身近に神々をまつってきたのです。

鎮守の森は、神が降りてくる聖なる場所であり、そこに屋舎を造り、神社としたのです。昔から、森は神のいるところ、降臨するところ、荒らせば罰があたるなど、信仰的な聖域とされ、みだりに人は立ち入らせない場所で、地域の人々がそこを信仰し尊敬して大切にしてきた場所なのです。このため人間活動の影響をあまり受けず、自然のまま維持されてきたとされています。

現在、鎮守の森が自然植生の見地から日本の持つ優れた資産として世界から注目を集めてきています。何故なら、鎮守の森はふるさとの木によるふるさとの森として、自然植生の面影を残しているのみならず、環境の保全、災害の防止や文化の基盤として機能してきたからです。

その鎮守の森も、時代の荒波を被って、今日にあります。

明治になって、神道を国家的存在と位置づけるべく、神社分離令（廃仏毀釈）（1869年、明治元年）神社合祀令（1906年、明治39年）で仏教施設はもとより全国で約7万社の神社とその神々、そして鎮守の森が姿を消したといわれています。

この神々の一元化による淘汰としての神社合祀令に対して、抗議の声をあげたのが熊野の森を愛した野人・南方熊楠であったことはよく知られています。特に神社合祀令に反対運動を起こしたのは、それによって多くの神社の鎮守の森が失われることを危惧したからです。

また、戦後には経済の発展にともない、土地が開発され、あちこちで都市化が進み、多くの森や雑木林は伐採されました。が、小さな鎮守の森として生き残ってきたものもあります。

今回は、生き残っている杉並の鎮守の森の例から、現在の植生の姿をとらえ、将来への展望についてまとめました。

調査の対象にした神社は、境内の広さは2800坪で、その社殿によると寛平年間(880~897)頃に創祀されたという神社です。まずは、第一にその鎮守の森の樹木を調べて、森全体の植生を把握し、今後につながるデータベースとして樹木基本台帳を整備して、第二に、昔の文献や関係者の証言から過去と現在からどんな植生の変遷が読み取れるのか調べてみる、及び日本の自然植生図から今後どのような変遷になるのか、50年後或いは100年後の姿を展望して、第三に、鎮守の森の持つ意味を幾つかあげてその価値を再認識して、環境問題が喧しく言われる中で鎮守の森の現代的意義を考えてみるということです。

第一の課題の某神社の鎮守の森の樹木調査結果ですが、幹周り40cm以上の樹木について調べた結果、36種、253本の樹木があり、樹種別構成を見ると針葉樹(51本、20%)、常緑広葉樹(82本、32%)、落葉広葉樹(120本、48%)という構成でした。樹木の平均幹回りは119cm、平均高さは16m。最大に樹種は、落葉広葉樹でした。

そして、最も多い樹木は、ケヤキの68本でした。ケヤキは、その枯葉が堆肥によいといわれ、江戸・東京近郊の農村地帯であった杉並の多くの農家がこの木を植えていたといわれています。杉並の区名になっているスギは1本でした。

第二の昔の文献や関係者の証言ですが、昭和15年9月に梅田芳明氏の著した「武州多摩郡上荻窪村風景変遷史」のなかの某神社の樹相の記述によれば、「字関根の南西傾斜地の上に鬱蒼たるスギの大木の森は、某神社であった」とあり、某神社の鎮守の森は、スギの大木の森であったことが文献から特定できたこと、

また、某神社の宮司の証言によれば、昭和 30 年頃スギの森が枯れ始めたことや藪になっていたところの竹林に白い花が咲き、一斉に枯れ始めたこと、クスノキの植樹をした以外自然に任せていたとの証言がありました。

天正 19 年、明治 28 年、昭和 11 年に社殿や本殿の修築・改築をしてきており、昭和 42 年（1967）には明治維新百年記念事業で、社殿の移転・増築・神門・回廊等を新築したりして、鎮守の森への人手の介入があったこと等が明らかになった。

一方、日本の自然植生論によれば、関東地方のこの地は常緑広葉樹林帯であるといわれており、「新修杉並区史」の杉並区の生物的環境のくだりで、「杉並区の過去の自然植生」について述べている。

「杉並区は鬱蒼とした森林で覆われていた。森林の植生を決める要因は、気候条件、土壌条件、そして人間の活動である。そして杉並区の気候条件は温度と降水量から暖温帯に属し、土壌条件は地層の表層が関東ローム層という火山灰土である武蔵野台地です。植生としては、ススキの群落から出発して落葉広葉樹林となり、気候条件に変化がなければ鬱蒼たる常緑広葉樹林となり森林は安定期に入る。」と述べている。

これらの情報をまとめると、某神社の鎮守の森は過去社殿の修改築・新築などの人手の介入で、都度新たな遷移を繰り返し、ケヤキなどの古木がある一方、若い樹相もあり、それらが混じった途中の段階にあり、これから常緑広葉樹の森に向かって遷移していくものと推定される。50 年後、100 年後に今回と同様な調査の結果が証明していくのではないかと思う。

尚、大正 9 年にご鎮座した明治神宮の森については、1980 年に明治神宮境内総合調査報告書が出ており、それによれば、幹周り 30cm 以上の樹木の樹相について、針葉樹については、大正 13 年に 13.7 千本あったが、昭和 46 年には 5 千本と大幅減少しており、常緑広葉樹は 6.4 千本であったが、昭和 46 年には 12.6 千本と大幅に増加している。落葉広葉樹は大正 13 年と昭和 46 年は 6.4 千本と変わらない。これらから、この地が常緑広葉樹林帯であるという一つの参考データといえるのではないかと思う。

第三は、都市の鎮守の森の機能についてです。

まずは、二酸化炭素の吸収機能です。地球温暖化の原因になっている二酸化炭素の吸収機能です。この鎮守の森の樹木の体積から、これまで吸収した二酸化炭素量が略 446 トンと算出されました。僅かと言えば僅かです。

自動車工業界によれば、平成 11 年度の国産乗用車の平均燃費は 19.9km/L の性能で、二酸化炭素の排出量は 116g/km だそうです。某神社の鎮守の森の吸収量はその 389 万キロメートル走行の排出量に相当します。年間 1 万キロメートル走行の自動車 389 台分です。

1990 年の IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の評価報告書で、地球上の炭素循環についてまとめたものによれば、二酸化炭素は化石燃料等人間活動によるものからの排出で、一方、二酸化炭素の吸収は、森林と海洋だけで、毎年 32 億トン大気中に増加しており、地球温暖化で気候変動を招いているといわれています。

少量といえ、二酸化炭素の吸収は貴重なものなのです。鎮守の森の大きな機能といえるのではないかと思います。また、光合成は、酸素を排出してくれるという機能もあるのです。

次いで、遮音機能です。樹木による反射による音の減衰です。静かな空間を演出し、精神の安定、癒してくれます。

第 3 には、常緑広葉樹の防災機能です。昭和 51 年の酒田の大火の時に、タブノキが延焼を防いだのはよくご存じだと思いますし、阪神大震災の時も、カシ類が防火機能を発揮したというのも、新聞で報道されました。あの明治神宮も、戦災に会い、1330 発の焼夷弾が落ちましたが、社殿等は全焼しましたが、森はあまり影響を受けなかったと報告されています。

それと、森は高木・亜高木・低木夜下草などの体系からなっています。一連の関係があるので、単独では成り立ちません。自然豊かな森は、動植物の種の豊かな森なのです。人の立ち入らない神域のある鎮守の森は、公園などと違って、そういった生物多様性を保持しているのです。

これまで述べてきましたが、鎮守の森は、生活・文化などの面で、自然と共生するという日本人の精神的基盤でなかったと思う次第です。その地にあった、自然植生をしっかりと押さえて、ふるさとの森が少し理解できたような気がします。

